

八一「甲子園があいと
銀子ちゃんの代理戦争
になって辛い」

Planador

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今年の甲子園がなんか勝ち進み方的にやれそだと思つただけの小ネタしかもメタ
――をしたかつたのに八一と銀子がいぢやつくだけになつた。実在の名称が出まくつ
てますが関係各所他皆様とは一切関係はございません。というか最新巻の時系列、よく
考えたらまだ2018年なんすね。

目次

八一「甲子園があいと銀子ちゃんの代理
戦争になつて辛い」

1

八一 「甲子園があいと銀子ちゃんの代理戦争になつて辛い」

棋士という生き物は大概外に出ないから、棋戦とか用事とか、もしくは学校とかがな
いと家に引きこもりがちな生き物である。今が夏休みシーズンだから余計にだ。

そして、師匠の家で、研究会をするでもなく、テレビに張り付く麗らかな女子が二人。
『14：00より、大阪代表履正社対石川代表星稜の決勝戦です』

今日は清滝一門は珍しく誰も棋戦がない。ふらふらと師匠の家に来たら銀子ちゃん
もいて、結果的に天衣以外は一門勢揃いだ。

そして清滝一門が誇る女流棋士の片割れとプロの二人が共々、清滝邸のテレビに囁り
付いている。しかも二人の間には見えない火花が飛び散っている。普通に怖い。

「大優勝旗……深紅……北陸に……」

「させない……関西のものは関西の物……他地方に渡してたまるか……」

さつきからあいも銀子ちゃんもずっとこれだ。特段一人が野球に関して関心を示す
ということがあつた覚えはない。この周辺だとタイガース応援のファンは普通に見か
けるけど。尚本拠はそれより近いはずのバッファローズファンはそこまで見ない。

何はともあれ甲子園。そりやあ銀子ちゃんからすれば、同じ年の人間がテレビで試合をしているという三回ある夏の一つかもしれないけれど。でも銀子ちゃん自身がテレビなりネットなりでそうやって映ることが多い且つ他人に興味を示さないから、特段甲子園に拘る必要もないと思うのだけど。

ちなみに銀子ちゃんに言わせれば『兵庫の黒い小童は準決勝で黙らせておいた、先制攻撃でねじ伏せておいた』だそうで。それに倣つてあいも『岐阜？　ああ作者が岐阜の人でしたね、でも準決勝でこつちが勝ちましたから』と応じる始末。ところで作者つてナニ？

俺としては、春の大会は我が福井県勢の敦賀氣比が四年前に優勝してゐるからなあ……それでいいんだけどなあ……今回はその敦賀氣比、ベスト16で負けちゃつたし……。「どうかあれでしょ！ 履正社は豊中！ 星稜は金沢！ 姉弟子的にも大阪市から見て豊中は目の前つて程じやないし星稜に至つてはあいは能登でしょ！ そこまでムキになる義理ある！」

「は？　ぶちころすぞわれ？」

「だれのせいでそうなつてるとおもつてゐるんですか？　じかくはあるんですか？」

「何も俺悪くないと思うけど仕方ないから謝つておいた。なんかいつぞやの水掛不動の時みたいだ。すんません……。

「そもそも今年の福井代表の敦賀つて、八一の故郷とは山一つどころじゃなく離れてるじゃない。それでそんなこと言うとか馬鹿なの死ぬの？」

「確かに嶺南が北陸かどうかは微妙なことでしたねごめんなさいでしたア！」

いや同じ福井県だけど！ でも確かに嶺南と俺の故郷の嶺北は殆ど国も違うし嶺南は北陸じやなくて北近畿という方が適切な気もするし観光ガイドも北近畿になることもあるし。実際どうなのが教えて偉い人。

「で、師匠はどうちを応援するんですか？ 北陸の人ですからやはり星稜ですよね？」
 「は？ 八一は大阪出てから長いから履正社でしょ？ ほら彼女がそう言つてるのよ隣に来なさい」

「空先生はここぞという時に師匠の彼女ということを推すのはなんなんですかっ！ 私だつて師匠の弟子だからと言つていいんですかっ！」

「別に止めないけど？ でも八一は私を選んでくれるという絶対の自信があるし？」

「勝ち抜けしていい気になるんじやありませんっ！ だらつ！ だらぶちつ！」
 「俺どうすりやいいの!? あと試合に関してはどつちにも肩入れしませんっ！」

試合前から騒がしい。試合開始の十分前にテレビ中継が始まつたばかりで、それから数分しか経つてないのにこれだ。

「まあ、たまには将棋以外のそういうのに関心示すのもいいことなんじやないの？」

「その前にそれどころじゃないけどね……最近気が張ることも多いから却つてゆとりがあるという意味ではいいのかかもしれないけど。桂香さん的にはどつち応援とかあるの？」

「別に私はどつちでもいいかなー。どつちが勝つても学校としては初優勝でしょ？ い試合ならそれでいいんじやないのかしら」

桂香さんのその対応はやっぱり大人だ。いや大人というより肩入れしないがための意見だとは思うけど。

「それよりも、八一くん的には、将棋の称号つて称号保持者に挑戦するという図式が常だから、どつちが勝つても初、という事例は珍しいんじやない？」

——言われてみればそうだ。その視点で考えると、確かに何か位が創設された際の初めて以外は、そういう例がない。

「八一くんから見れば、誰よりも年上として試合を見れる初めての夏でしょ。だから、そういう観点で八一くんも見てればいいんじやないかな。そうすれば、八一くんがこれまでどういう感じで見られてたのかもわかるようになるかもしれないし」

「それはありかもしれないけど、それより正直この二人のお目付け役としているしかなさそうだけど……」

「ああ、まあ、確かにそうねえ……迷惑じやない？」

「別に。でも桂香さんは今日はいるんじゃないの？」

「あー、私は道場の方にいるつもりなのよね」

桂香さんがいないとなると、一から俺が見張つてないとどこかでこの二人は取つ組み合いを始めてもおかしくなさそうなんだけどな……。

「とにかく、私とお父さんは道場の方で誰かしらと指してたから。八一くんはお任せするけど、何かあつたら呼んでね？」

仕方ない、試合はともかく、こなさなきやいけない作業をしつつ見張るか……。

——で、試合中はまーとにかく二人ともずっと騒がしくて。道場が割と静謐なことを考えれば、こつちの音量で邪魔になつてないか心配になるレベル。

『打つたーあ！ タイムリーツーベースで星稜先制つ！』

『これが！ 势い！ あとは自責点なしの投手力で抑えるだけですっ！』

「ほお？ 抑え込めるならやつてみなさいよ？」

『伸びる！ 伸びる！ ——入つたー！ 履正社！ スリーランホームランで逆転！

3—1ツ！』

「大会通してピッチャーの初自責点よ？ これが実力よ？ 強打の前には全てが屈するのよ？」

「まだですっ！ 三回表で試合が決まるなんてことはありませんっ！」

『セカンドフライだー！ スリーアウト！ 三者残塁！ しかし星稜七回裏、3—3で履正社に追いつきましたー！』

「ふふふ……まだまだこれからですよ……」

「クツ……やつてやろうじやないの……」

『タイムリー！ 追いつかれて直後の八回表履正社勝ち越しー！』

「やつてやつたわよ、文句ない？」

「ま、まだあ……」

——そして。

『ぼてぼての当たり！ セカンドゴロ！ 二塁アウト！ 一塁送球！ ——アウトオ！ ダブルプレーで試合が終わりましたあ！』

「はわっ!? あ、ああ……あああ——」

履正社優勝の瞬間、頭を抱えてあいはその場に崩れ落ちた。正直弟子の表情がコロコロ変わるのは見てるのは面白かつたけど口にはしない。

これで、北陸勢の大優勝旗はまたもお預け。大阪勢の二年連続優勝が決まりた。同じ都道府県の別の高校が連續して優勝するのは44年ぶりらしい。「ま、これでまた楽しみが次回に持ち越しになつたと思えばいいでしょ。今回で終わり

「という話じゃないんだし」

「お、おば、空先生はこれを楽しみというんですか!? 楽しみと悲願は違うんです！ 今回こそ今回こそと思い続ける県がどれだけあると思つてるんですか!? 北陸と東北は地域全体で優勝旗を持ち帰ることすら今まで一切出来てないんですよ!? いいですよね大阪はそんな悩みとは無縁で！ 一回どころじやなくて何回も五連続敬遠されてみろつてもんですつ！」

「あーあーあーあいのヒートアップが止まらない。というか五連続敬遠の時生まれてないよね君？ 僕もか。

「でも履正社も初優勝じゃない」

「県全体で優勝経験ないと学校がどことか関係ないですつ！ だらつ！ だらぶちつ！」

確かに、昨年の決勝は話題になつてたなあ。特段見てなくとも勝手に情報が入つてきていた。あの時も東北勢に初の優勝旗をつて騒がれてたつけ。俺は——まあ銀子ちゃんと想いが通じてまだ浮かれてた頃だつたわ。

「というか東北も未だに地域で優勝ないのかあ。東北……棋士……祭神雷……いややめようこの話題。」

「——うー……うーつ！」

そしてあいはどうにも感情の行き場をなくしているようだ。将棋が一切絡まないことでこうも感情的になるのも珍しい。

そして、どこか思いつめたかのようだ、だけど何かを決意したかのようにしてあいが立ち上がる。

「あら、どこか行くの？」

「道場でどなたかと指してきますっ！」

ピシャリ、と衾が閉められて、ズンズンという足音が遠ざかっていく。あいがああもう斯う斯うと歩くとはなあ……まあそれでも俺が普通に歩くぐらいの足音にしかならないのだけど。こうして見るとJSは可愛い。口にしたら銀子ちゃんに絞められるけど。

そして、居間には俺と銀子ちゃんだけが残される。画面の向こうでは、優勝会見も終わり、慌ただしく関係者らが閉会式の準備を進めている。

「——八一。肩」

「はいはい」

麦茶をついで、改めて銀子ちゃんの隣に腰を下ろすと、すぐに左肩にふわっとした香りと共にずしりと重しが乗つた。

「あいがすぐに戻つてくるかもしないよ？」

「大丈夫よ。ほら耳を澄ませてみなさい」

パシ——ーン……。

「ほらね？」

うわあ……あいちやんイライラしてるう……。あそこまで甲高い音がするぐらいに強く打ち付けてたら、相手もびっくりしてるんじやないだろうか。気迫に。

「あれをぶつけられる相手は可愛そうになるな……誰が受けてるかはわからないけど銀子ちゃん程ではないけれど、いらいらした時の相手を意地でも潰しに行くというのは、それこそ銀子ちゃん譲りなとこがある。最初はそれを銀子ちゃんにやられてたけど、気付けば本人からその発散の仕方を教わっていたらしい。

夏場の午後四時過ぎは、曇っていてもやはりまだ明るくて、雲間から漏れる日差しが部屋の中まで差し込んでくる。

改めて横目で銀子ちゃんを見てみる。学校も棋戦も何もないからこそ今は私服で、外に出ていたわけでもないから、今の格好はラフ、というか楽に半袖にハーフパンツだ。半袖と言つても、それがTシャツであるが故、今だけは人前には出ないという絶対の意思を感じる。

しかし、何の変哲もないTシャツ着てるだけで様になるのはやつぱり美少女だなあ……といふかこれ確か俺の古着じやなかつたつけ……？

「別にテレビはもう消してもいいわよ」

「あ、閉会式まで見るわけじゃないのね」

「感想戦も終わつたでしょ？」

感想戦＝記者会見。まあ確かにそういう考え方もあるか。閉会式は実際試合とは直接は関係ないし。

「どうとかなんか不満そうに見えるんだけど……」

「――二人きりなのに何もしてこない」

「隣で誰が聞き耳立ててるかわからないんで今は勘弁して……あいもいるし……」

「許す」

「許されました」

「でもこれぐらいなら許されるわよね？」

その声が聞こえるが早いか、ふつと左肩が急に軽くなつた。刹那の間をおいて、視界が急に暗くなり、口元が温かいものに覆われて息が出来なくなる。

勢いがつきすぎて、そのまま後ろに倒れてしまう。――これあれだ。完全に押し倒されてるよ。

「これぐらい、の域を超えてるでしょ、これ」

「これでも我慢してる方なのよ？」

「うんまあそうだろうとは思うけど……」

でも、未だにキスの際は今みたいに自分から攻めても毎回顔真っ赤にする人に言われましてもな。

「どうか、話を戻すけど、将棋以外は殆ど関心示すことのなかつた銀子ちゃんが、なんで今日の甲子園決勝だけはこうも張り合いを？」

俺に覆いかぶさつていた銀子ちゃんが、左に転がり、二人して天井を見上げている格好になる。

「——だつて」

溜めを作る間に左肩がグリグリとされる。まるで猫がマーキングするかのようだ。

「八一」を小童に取られるつてさ、つい考えちゃう自分がいてさ……」

それを聞いて、少しだけふつと笑みが零れた。まあ、要は、とどのつまり。

「勝手に代理戦争という体にして見てたつてこと？」

そういうと、左肩に載った頭がまたグリグリと押し付けられた。つまりそういうことらしい。

「はいはい」

今だけは年上の何とやらだ。包容力包容力……。

「俺は銀子ちゃんの特別な人で、俺だつてそう想つてるわけですから、わざわざ主張しなくてもいいのに」

「——あの小童に乗せられた……」

「だろうね、そうだと思った」

でなければ、今の銀子ちゃんが自分から一々突つかかる理由もない。正直嫉妬される、というのは気分悪いものではないし。

昨年、銀子ちゃんがプロになれたから、改めて想いを伝えて、師匠の家の一門パー
ティーの場でみんなにはそのことを話した。正直、あいも天衣もその関係で色々あつた
けど、一応今は落ち着いている。でも一人からはまだ諦めきれないとかなんとかいつ
て、事ある毎に銀子ちゃんとは何かしら起こしてるというのが実情だ。

というより、想いを伝えたということならば、もう気付けば一年以上経つてるんだよ
な……。

「小童との約束事。代表が勝つた方が八一を好きに出来る」

「それはあいが勝つたら俺は何をされてたんだろうね……？」

「さあ？ 自宅で小童に何かしら迫られてたんじやないの？」

「いや銀子ちゃんはそれでいいのよくないで——」

口にしてる途中でまた唐突に口を物理的に塞がれる。まあ、とりあえず今はこれで氣
が済むのならないのだけど。

うう……俺だつてもつと銀子ちゃんといちやつきたい……でも隣にはあいがいて、将

棋を指してゐるとはいいつこつちに来るかもわからない……。

「でも、こうして見るとすごいわよね……。将棋なんて、究極的には個人プレーなのだから、こうもチームでやる、というイメージが私には全然つかない」

「あれ、そう?」

「野球つてチームプレーのスポーツの筆頭でしょ? 誰かと協力して競技を進める、といふのがどうしても感覚的に湧かなくて。ほら、私が基本相手は捻り潰すものだと思つてるから、こういうのはうまくいかなさそうで……」

銀子ちゃんは、炎天下で、数時間もプレーをするということが自分に出来ると思えないと、いうことを言いたいのかと初めは思つたのだけど、読みを外した。

ああそつか、これは銀子ちゃんにとつての感想戦か。あいが去つて、代わりに立会人を務めた俺との。

で、その上で俺の考えをそのまま述べるなら。

「俺はそんなことないと思うけどな?」

俺は、銀子ちゃんのその考えをまず否定する。

「そりや究極的にはそだらうけど、というかそなうなうざるをえないけど。でも、その準備みたいなものは誰かの協力があつて成り立つものでしょ。余程他の人と研究会を断つて一人でソフトでやるという人もいないわけじやないけど、大概誰かしら研究仲間

がいて、ライバルがいて、その中で切磋琢磨するものじやないかな？ 銀子ちゃんはま
ずは表立つて生石さんと研究会してるわけだし、その時点でただの個人プレー、といふ
ことはないでしょ。勿論俺もだけどね』

師匠に弟子入りして、飛馬お兄ちゃんからいろはを教わって、色んな人と対局して研
究会して——そして俺と銀子ちゃんとで高め合つた。これをチームプレーと言わずに
なんと言おうか。

「野球はどうなんだろ……門外漢だからこれということは言えないけど、サッカー以上
に自身の役割が明確且つ不動だから、絶対的なチームプレー、だけどだからこそ個々人
の力量が一目でわかり、スター選手なんかはよくも悪くもとにかく目立つ——というと
こかなと。そういう人たちからすれば、ある種自分自身のと勝負となるどこがあつて、
故に個人プレーにもなり得る、じやないのかな。そういう意味では案外将棋と変わらな
いと思うよ」

「そこは具体的じやないのね」

「門外漢つて言つてるでしょーが」

俺だつて知識レベルは銀子ちゃん程——というか本を読むだけ下手すると銀子ちや
んの方が知つてるかもわからない。

「星稜は特定の投手ばかり注目されてた節はあるけど、大会全体を見れば当人含めた四

人のピッチャーはみんな継投でもなんでも実力があつたと思うし。打線だつて申し分ないものだと思うし。でも結果だけを見るならば、今回は履正社のチームプレーが上回つた。ただそれだけ。だからそういう意味では、深紅の大優勝旗ははつきり言つておまけかな。銀子ちゃんの女流二冠だつて、前に話してくれたことを総合すれば、それだつておまけつてことじやないかな？ それと一緒にだよ」

「ふーん……」

なんとなく長くなつてしまつた。だけど、銀子ちゃんもこれでわかってくれたかな——と思つたのだけど。

「八一がこうも難しい話をする日がくるなんてねえ」

「それは流石にひどくない!?」

「昔から勉強は出来ない方だつたでしょ、ばーかばーか。はい感想戦しゅーりよー」

「ああもう、俺が長々話したのはなんだつたんだ！」

「今の八一の話聞いてたら疲れた」

「悪かつたね長くて。それで？」

「寝る」

「どこで？」

「おやすみ」

「ここで!?」

「八一も寝ればいいじゃん」

「そりや桜ノ宮じやないし勝手知つたるところだけさあ……」「それはともかくちよつとこつち向いて」

「……。ずり、と畳の上を滑る音がして、再び口が湿気にもみれる。というか地味に器用だな

「間抜けな顔」

「銀子ちゃんはかわいいよ」

「——ばかやいち」

「そうこうしている内にお姫様はくかーと寝始めてしまった。ほんとにすぐ寝るなこの子は……。」

しかし、外じや見ることの出来ない真っ白な腕がどことなく扇情的で、こういう時でもないと見る機会が本当にならないから、俺であつてもドキッとしてしまって。

——こうも綺麗に育つちゃうと、他の色に染めるのも惜しくなるよなあ……まあ俺の色に染めてる最中とも言えるけど……いかんいかん。

まあ、だけど、今だけは。

「おやすみ、銀子ちゃん」

ゆっくり午睡を楽しむことにしよう。銀子ちゃんと、昔みたいに、二人で。

「——あらあら、反応がないと思つたらやつぱりね——」

「おばさん……師匠の腕に抱き着いて、頭はくつつけて、それはあいに見せつけてるんですけど……？ 師匠も……だらしない顔……だら……だらぶち……」